

## 東西文明の比較 (1)

陽光新聞社・顧問  
塩澤宏宣

地球は丸いのに、なぜ争いが絶えないのか。「平和」。これは人類永遠のテーマです。私は今頃になって、このテーマに気がつきました。その手始めに「文明とは？」を考えました。そのきっかけは、1996年に出版されたサミュエル・ハンティントンによる「文明の衝突(日本語版:集英社)」を読んだことです。米ソ冷戦というイデオロギーの対立が終わり、これからは「文明と文明の衝突」が対立軸になるという論です。そしてもうひとつの影響は、私の大好きな塩野七生さん

のローマに関する著作です。

丸い地球に、奇しくも同じころ2大文明が誕生したことも興味をそそられました。パクス・ローマーナは「ローマによる平和」の意味ですが、パクス・ブリタニカ、パクス・アメリカーナが続き、これらが渾然となっていくのまにか「文明とは？」が「文明とは覇権なり」になってしまいました。今日の争いはココ(覇権争い)に大きな原因があると考える昨今です。

### 東西に出現した世界帝国

伝承によれば、ローマは紀元前753年に建国された。史実によれば、ローマは紀元前270年にイタリア半島を統一したとある。地中海世界ではザマの戦いで、スキピオ(BC236～BC183年頃、共和政ローマ期の軍人、政治家)の率いるローマ軍がハンニバル(BC247～BC183年/BC182年、カルタゴの将軍)のカルタゴ軍を打ち破った。そのころユーラシア大陸の東では前221年、戦国時代に終止符を打ち秦が統一帝国を打ち立てた。始皇帝は、郡県制を採用し、度量衡・

文字・貨幣などを統一した。やがて始皇帝の死後、秦は内乱に陥り滅んだ。その混乱の中から、楚の項羽と漢の劉邦が戦って漢が勝利し、漢帝国が誕生。前202年のことだ。

奇しくも同じころ、ユーラシア大陸の東と西「中国文明圏」と「地中海文明圏」が出現した。そのころ日本はどのような時代であったか。日本は弥生時代。中国や地中海と比べて農業が遅れていた。狩猟採集の対象である小動物や植物が日本列島には豊富にあったから、わざわざ農耕しなくとも不自由しなかった。豊かな土壌と水、温暖な気候に恵まれた日本列島は、文明に目覚めていなかった。

### ローマの誕生、神話から史実へ

世界最高の傑作といわれるホメロスの叙事詩「イーリアス」によれば、ギリシャ軍の武将オデュッセウスが考案した「トロイの木馬」によりトロイは落城(紀元前13世紀頃)した。トロイ王の婿アイネイアス(女神ヴィーナスと人間の間に来た子)は老いた父と息子とわずか数人の人々を引き連れ、脱出に成功した。この一行がたどり着いたのがローマ近くの海岸。そこからローマが始まる。アイネイアスの子孫と伝えられるロムルスとレムスという双子が生まれた。やがて王位争いが起こり、ロムルスが勝利して初代王になる。前753年4月とされる。ローマの名はロムルスから来た。

やがて神話伝承を離れて「歴史の時代」になる。この時代のイタリア半島は、中部から北はエトルリア人が支配し、南部はギリシャ人の支配下にあった。エトルリア人の歴史は未だに不明確だが、鉄器の製造法を知っていた。又南部のギリシャ人との経済交流もあったようだ。古代エトルリアは12の都市国家による連邦制をとっていた。しかし、各都市国家は独立志向が強く、連帯感もなく、やがてそれが致命傷となる。

一方ギリシャは耕作地に恵まれないため早くから植民地を求めて地中海沿岸へ進出していた。東

は黒海沿岸、西はフランスからスペインにまで達していた。イタリア半島ではナポリをはじめターラント、シチリア島のメッシーナ、シラクサ、アグリジェント等々。ギリシャの都市国家もお互いの連帯意識はなかった。ローマという地はこうした先進民族の築いた都市国家の中間、いわば列強都市国家の谷間にできた。

## ロムルスのローマ

ローマは18歳のロムルス<sup>1)</sup>と3000人のラテン人によって建国された。国政を三つの機関に分けた。「王・元老院・市民集会」である。王は宗教催事と軍事の最高責任者であり、市民集会で選ばれた。王に助言を与えるのは100名の元老院。市民集会はローマ市民全員で構成された。王を始めとする政府の役人を選ぶ役割を持つ。元老院の助言を得て王が立案した政策の認否を問うのも市民集会の役目。39年に及ぶロムルスからヌマ<sup>2)</sup>に引き継がれた。

ヌマはかつてロムルス王が征服したサビーニ族の出身だ。ローマの王位は終身だが世襲ではない。いわば「終身大統領」がふさわしい。ヌマの業績は「法と習慣の改善」であった。「法」とは秩序の確立をいい、人間であるための「礼節」を教え、自らの力の限界を知ると同時に、それを越える存在への怖れを教えたのである。

ヌマは防衛以外の戦闘は不要と考え、農業と牧畜を盛んにした。大工・鉄工・染色・陶工などの職能別団体を結成した。これらの施策はローマ人とサビーニ人の融和のためと考えられる。ヌマの治世で最も特筆すべきは、「宗教の改革」だ。ローマ人は多くの神々を持っていたが、ヌマはそれらを整理して、神々を敬うことの大切さを教えた。ローマ人は神に「守護」を求めた。ローマ人の神々はユピテル神(神々の王)、その妻のユノー女神、ヴェヌス女神(美と愛を司る)、ディアナ女神(狩の女神)、アポロ(学芸)、アテネ(知の女神)、マルス(戦いの神)、ヤヌス神など。農業はケレス女神、葡

萄酒作りはバッカス、経済発展はメルクリウス、病気にはアスクレピオス等。ローマ人は多民族の神々も積極的に取り込んだ。

## ローマ帝国の衰亡

繁栄はある臨界点まで達すると、衰退に転じる。ローマの繁栄の第一の要因は、当時の地中海世界が5000万人を養うだけの豊かさをもっていたこと。といっても余剰農産物を出せる地域は、ナイルデルタ、クレタ島、チュニジア、シチリアなど、限られていた。そのため地中海世界は、余剰農産物を巡る争奪戦争が耐えることが無かった。カエサル(BC100～BC44年)は余剰農産物の適正配分することを試みて地中海世界をひとつの領域国家とし、地域ごとの政治システムを中央集権的な統治体制に改めようとした。

その志半ばでカエサルは暗殺されてしまうが、その遺志を継ぎアウグストゥス(BC63年9月23日～BC14年8月19日)によってローマ帝国の基礎が築かれ、以後300年にわたる繁栄を続けた。ローマ帝国が繁栄し、とりわけイタリア半島に住む人々が豊かになると、彼らは兵役を嫌うようになり、やがて国境警備は辺境の異民族が担うようになる。

帝国の国土が巨大化すると国境は拡大し、軍事力は分散する。国境紛争では異民族兵士は弱い。状況が劣勢になると、あっさり敵に寝返ってしまう。やがて軍隊が内部崩壊を起こし、ローマは次第に衰退する。

ローマ帝国の場合、その分岐点は2世紀はじめのトラヤヌス帝(在位98～117年)とハドリアヌス帝(在位117～138年)のころにあたる。トラヤヌス帝は領土拡大を目指して、ルーマニアからイラクあたりまで占領した。これを継いだハドリアヌス帝は、その広大な領地に振り回されることになる。次第に異民族のコントロールがきかなくなり、内政重視に切り替えるが間に合わなかった。メソポタミア遠征から帰国した兵士が疫病を持ち帰り、そ

れが元で人口が激減した(2000万人死亡したといわれる)。

## 衰亡のメカニズム

文明は必ず滅びる。永久に発展を続ける文明は存在しない。「中国4000年」という言い方があるが、中国文明の長さを象徴したものであっても、中国文明が連綿とした連続性は無い。いくつもの民族が築いた文明が「交代して」続いたに過ぎない。

ひとつの文明が興り、栄え、消えるという文明の興亡はヒトを典型とする生物の生涯と似ている。シュメール(メソポタミヤ南部地域。初期のメソポタミヤ文明を指す)のように隆盛の後、急速に衰退した文明はまれだ。しかし、シュメールの例は灌漑農業という強引な生産手段が「土地の荒廃」を招いたという特異な例である。文明衰亡のメカニズムは、敵国に攻められて滅びたという例を除けば、「繁栄の中」に見出せる。

## ここで唐突ですが… 「COP21合意」について

中国の文明についてもっと述べようと思いましたが、12月12日の気候変動パリ会議で「地球温

暖化阻止」のための歴史的一步を踏み出したという情報に目を転じます。

パリ会議は、世界196か国・地域が参加しました。地球の危機に際して、全ての国が心をひとつにできたのです。文明・文化・貧富・宗教・民族…あらゆる違いを超越して人類が一体化する可能性があることを感じました。感動の瞬間ではないでしょうか。 (中国文明は次回にします)

## ■注

1) **ロムルス** : (Romulus, BC771 ~ BC717年) は、ローマの建国神話に登場するローマの建設者で、伝説上の王政ローマ建国の初代王である。ロームルスとも呼ばれる。ローマの最初の国王として元老院や軍団など古代ローマの根幹を整備した。周辺の都市国家を征服して国を豊かにしたが、同時に強権的な王として知られる。  
(ウィキペディア)

2) **ヌマ・ポンピリウス** : (Numa Pompilius, BC750 ~ BC673年) は、王政ローマにおける第2代の王。一般的には伝説上の存在である。戦争に次ぐ戦争でローマを拡大した初代王ロムルスとは異なり、43年におよぶ治世中に一度も戦争をせずに内政を充実させたとされている。  
(ウィキペディア)